

1987. 12



10 ヴァン・デル・ヴァイデン 聖告
1435年ごろ パリ ルーヴル美術館
Van der Weyden, The Annunciation.
c.1435. Louvre, Paris.

天使ガブリエルは神からつかわされて、乙女マリアのところに來て、言った、「恵まれた娘よ、おめでとう。主があなたとともにいられます。あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。」

そこで、マリアは天使に言った。「どうして、そんなことがあり得ましょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに。」

天使が答えて言った、「聖霊はあなたに臨み、いと高きものの力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生まれ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。」

(新訳聖書「ルカの福音書」第一章より)

一冊の雑誌

伊藤俊洋

師走の声と共に忘年会の便りがチラホラきこえてくる。学生にとっては、クラスコンパやクラブの納会等々、出費もかさむ季節である。寒い時は鍋物がいい。熱カンに海豚ちりなんか最高だが、学生には、一寸高級すぎるかも知れない。フグと聴いて一瞬躊躇するのはあながち経済的なことばかりではなさそうだ。フグ中毒で死亡する例は医学万能と言われる現在でも後を絶たない。

我が国のフグ毒の研究は、世界に冠たるものがある。古くからフグを食用として来た経験をもとに、明治の中頃から本格的な研究が始まり、明治の末には日本人によってその毒成分がテトロドトキシンと命名され、昭和25年に結晶化に成功している。昭和39年には2人の日本人化学者（津田恭介、平田義正）により、それぞれ独自にその複雑な化学構造が決定され、日本の天然物化学のレベルの高さが世界の注目を集めることとなった。フグ毒は神経の膜表面にあるリセプターに結合し、そのナトリウムイオンチャンネルを閉じてしまう。興奮時に Na^+ が細胞に入ってくるために、神経の伝達機能が麻痺してしまう。

食通に言わせると、あの唇に感ずる軽いシビレが何とも言えない快感であるという。若い人達がよく言う“シビレル”に通ずるものではないだろうが、“もう少しシビレたい、もう少し”と思っているうちに昇天してしまう例もあるらしい。フグを楽しむ人は、自ら包丁を使う人が多い。内臓と皮さえ除けばまず心配ないのだが、魚の内臓の美味なることを知っ

ている人は、あの誘惑に負けてしまうらしい。このフグの猛毒の恐怖も今は昔のことになりつつある。フグ毒は、フグに特有のものでなく、多くの海洋微生物（有毒プランクトン）にも分布し、これが貝類を介しての食物連鎖でフグの体内に蓄積するのではないかという考えもある。最近は養殖フグも大量に出廻っており、毒の無いフグを心おきなく楽しむことも夢ではなさそうだ。

毒と薬は紙一重という。毒も使いようで起死回生の妙薬ともなる。フグ毒もしかりである。人類は長い歴史の中で、多くの生命を犠牲にしながら、毒と戦って来た。歴史の大きな曲り門で毒は常に重要な役割りを果たして来た。文学の世界でもしかりである。古くはギリシャ・ローマの時代の記録や、万葉の時代の書物の中に各種の植物毒などが登場している。シェイクスピアの多くの作品の中で、毒は重要な脇役を演じている。“シェイクスピア薬品考”という毒薬解説書もあるくらいで、近年ではアガサ・クリスティーの作品群の多くに化学の専門家が登場する。

身のまわりを毒物センサーの眼で眺めると、現代社会はまさに毒の洪水である。衣、食、住、いずれの世界でも、様々な毒の気配を感じる。日常生活の中で不測の中毒事故も後を絶たない。筑波大学病院に中毒110番が開設されて久しい。一時は経済的に成り立たなくて閉鎖された時期もあったが、その後、関東と関西に中毒110番が1局ずつ開局している。

（関東 0298-52-9999、関西 06-451-9999）

「毒からの救出体制を確立して欲しい」

これは、子供や老人をかかえる家庭の切実な願いである。このようなことを書いている私は、決して毒の専門家ではない。むしろ全くの素人と言ってよい。私には毒について1つのほろ苦い想い出がある。

大学で限られた戦力と時間を使って思い通りの研究活動を続けていくためには、多くの人の助けを得なければならない。学会活動などを通してお互いに助け合うことになる。学術専門雑誌や一般会員の啓蒙情報誌を発行することも学会の重要な活動である。私の所属する日本化学会では、毎月5種類の雑誌を発行している。その編集作業は、一般会員の奉仕活動に負っている。何年かの間隔をおいて、その雑用が廻わって来る。雑誌によってそれぞれ編集方針は異なるのであるが、私が手伝うことになった『化学と工業』誌では、2年間の奉仕活動で24冊の雑誌を手がけることになり、その内の1冊は、ほとんどすべて自分の思いのままの編集が許された。私の担当したその1冊の雑誌が、特集『毒の化学（化学と工業、37巻11号）』であった。前述の毒談義はその編集メモの1コマである。

今や毒も遺伝子工学を駆使して、遺伝子から毒素タンパク質をデザインする時代である。有史以来、史上最強の毒とは一体どんなものだったのだろうか。細菌毒の一種であるボツリヌス菌毒素や破傷風菌毒素は、その最右翼であろう。これらは、1ミリグラムで実にマウス1000頭を殺すことができるという。マウスを対象にしたLD₅₀（総個体数中の半数が死亡する量）で比較すると、実にフグ毒の1000倍以上の毒力を持っている。ボツリヌス中毒は、別名“ソーセージ中毒”とも言われ、ヨーロッパでは、古くから缶詰、ハム、ソーセージ、魚の燻製などの保存食に見られた。我が国でも古くから生魚と米飯を発酵させた

“いずし”による中毒例が多発していたが、その後、衛生管理が行き届くようになってからほとんど見られなくなった。この菌は、嫌気性菌であるため、3年前に発生した真空パック入りの「カラシレンコン」によるボツリヌス菌中毒は、新しい食品加工法に原因の1つがあった。今後も、新しい調理法や保存法が開発されるたびに、当事者は心しなければならない事件となった。“もういいだろう”という心の油断を見透かして細菌は攻撃してくる。ボツリヌス菌など培養して研究している人の気が知れないが、思いがけない人がこれをやっていたりする。

1冊の雑誌を編集して読者のもとに届けるまでに、多くの人の意見を求め、一線の研究者に解説を依頼する。できるだけ読者の食指が動くようにエキサイティングな見出しをつける。目次の並べ方、要旨、図表の配置など、細心の注意を払って味付けしても、いざ1冊の雑誌として書架に並ぶと意外と見栄えがしない。廻りの雑誌がそれ以上に晴れがましくカラフルで、魅力的で、デザインも斬新なのだ。何事にも、生みの苦しみというのは付きものなのだが、それをひとたび味わってみると、他人の創った雑誌の出来具合がいやに気になる。“ウーン、ナルホド”と膝を打って感心するタイトルに出会うと、こっそり書き留めておいたりする。こうして様々な思いをのせて世に送り出される雑誌は数知れないが、現在、和・洋の学術専門誌、啓蒙誌、レジャー誌など合わせて、教養図書館に約350誌、衛生学部図書館に約180誌、医学図書館に約2000誌配架されている。

学術専門誌は、1年後に製本され書庫に保管されるが、啓蒙誌、レジャー誌の大半は、1年後にはスクラップとなって短い生涯を閉じる。
(化学)

1984年1月1日、ブレーメン

野村 廣之

日本での大騒ぎが信じられないくらいドイツの正月は、静かなものだった。元日の朝、細かい雨が降っていた。普段の年なら、雨ではなく雪であって然るべきであったが、その年の冬は比較的暖かな冬であったのだ。前日の12月31日に、リュベックからハンブルクを経由してブレーメンにやって来た僕は、行き当りばったりと、中央駅の右正面にいくつか並んでいるホテルのうちの1つ、ホテル・ツアーポストに宿をとっていた。本来なら行き当りばったりではなく、大抵はそれぞれの町の中央駅の近くにあるツーリスト・インフォメーションでできるだけ安いペンションかホテルをおしえてもらうのだが、その日は夜遅く着いたのでインフォメーションはもう閉っていたのだ。ホテル・ツアーポストの宿賃は、シングル・シャワー付・朝食付で確か55マルク。同程度の部屋で、フランクフルトの駅前のホテルだと60~70マルク程であったから、安い方の部類に入るだろう。

1月1日は、日曜日だった。町には、ほとんど人がいない。中央駅から放射状に伸びている通りのうちの1本をたどって行くと、町の本来の中心部である旧市街に達する。ブレーメンの旧市街の1番の特徴は、リュベックと同様に堀によってまわりを囲まれていることだろう。旧市街の広場に立って市庁舎や教会の古い建物をながめる。なにしろ、10日前にはじめてドイツへやって来たのでこうい

うなんでもない風景が物珍しいのだ。細かい雨の中を2両連結の市街電車がゆっくりと通り過ぎて行く。ホテルのフロントでもらった市内案内地図を見る。市内の全ての通りに名前がついているので、自分の現在位置さえわかっていたら、比較的簡単に目的地に達することができるはずなのだが、必ずしもそう簡単に事は運ばない。明日の午前中に行くことになっているゲーテ・インスティトゥートのある場所を確かめておきたいと思うのだが、地図でみると旧市街から南へ2キロメートル程のところである。歩いて行ってもよいが、少し距離がある。目の前を行き来している市電に乗った方がよさそうだが、しかし、もらった地図には市電の路線までは記載されていない。それにどうやって乗ったらよいのかわからない。より正確に言えば、どうやって切符を買えばよいのかわからない。フランクフルトでは、市電の停留所には必ず切符の自動販売機が備えつけてあったが、ここにはそんな自動販売機は見当たらない。躊躇^{ためら}った末に、結局、歩いて行くことにしたが、停留所で市電を待っているおばさんに尋ねてみれば良かったのだ。ちなみにブレーメンでは、その他の大抵のドイツの町と同様に、市電やバスに乗るときには乗車の際に運転士に料金を支払い切符を受けとる。料金は、ミュンヘンのような大都市は別として、市内均一で、1駅乗っても終点まで乗っても同一料金である。切符を買

ったならそのままにしておかないで、車内にある打刻機に差し込んで乗車した日時を打刻しておかなければならない。切符を運転士から買うことなく、後ろのドアから乗車してくる客も大勢いるが、彼らは定期券か回数券を持っているのだ。車掌もおらず普段検札もないから無賃乗車をするのは簡単だが、抜き打ちで行なわれる検札に引っかかると運賃の何十倍もの罰金を払わなければならない。

ゲーテ・インスティトゥート・ブレーメンは、フェーデルヘーレン通り78番地にあった。思ったより小さな3階建ての建物だが、比較的最近建てられたものらしくベンキの色がまだ新しかった。僕が参加することになっている次のコースは、翌日から始まるが、この日は日曜日ということもあって玄関のドアは閉ざされたままであった。ゲーテ・インスティトゥートというのは、西独政府の財政的援助を受けつつ独立して運営されているドイツ語

を外国人に教えるための学校である。本部はミュンヘンにあるはずだが、西独国内外に多数の校舎を持ち、日本では東京・京都・大阪の3地区にある。この時僕は、1月2日から2月25日までの標準2ヶ月コースに参加することになっていた。フェーデルヘーレン通り78番地を訪ねた後、この日どこへ行ったのか実はあまりよく覚えていない。雨は途中で止んだように記憶している。ブレーメン自体は観光都市ではなく商工業都市なので、名所旧跡といったものもあまりなく、もう1度旧市街へ戻って童話のブレーメンの音楽隊を形どったブロンズ像でもながめていたのだろう。翌1月2日、朝8時半頃ゲーテ・インスティトゥートへ行くためにトランクを下げて通りを歩いていたとき、酒場のドアから3人の若者たちが出て来た光景は鮮明に覚えている。彼らは髪の毛を染めたバンカーであった。

(独語)



ゲーテ・インスティトゥート・ブレーメンでいっしょになったクラスの仲間たち

アンケート集計結果

——利用実態と期待——

新図書館建設に先立ち、本年7月にアンケートを実施しました。今回の調査は今後の図書館サービス活動の在り方及び、新図書館建設に向けての needs 把握等を目的としました。実施に際し皆様の御協力をいただき、無事終了することができましたことを厚くお礼申し上げます。

1. 調査対象と実施方法

昭和62年7月3日(金)から7月10日(金)の間の入館者のうち511人にアンケートをお願いしました。その内368人(有効回答率72%)の方が答えて下さいました。

2. 集計結果

A あなたは図書館を何回利用していますか？

1. 初めて	19人	5%
2. 週1回	96人	26%
2回	74人	20%
3回	39人	10%
4回	12人	3%
5回	10人	2%
6回	8人	2%
3. 月1回	11人	3%
2回	26人	7%
3回	18人	5%
4回	7人	2%
5回	6人	2%
6回	2人	1%
7回	1人	1%
8回	1人	1%

4. ※その他	26人	7%
無記入	12人	3%
計	368人	100%

※その他

ときどき	17人
不定期	5人
テスト前	3人
数えた事無し	1人

B あなたが図書館を利用する目的はなんですか？

1. 学習のため	280人	58%
2. 貸出・閲覧のため	184人	38%
3. ※その他	18人	4%
計	482人	100%

※その他

ひまつぶし	7人
新聞を読む	6人
コピー他	3人
研究	2人

C あなたは新図書館に何を期待しますか？

施設面	248人	57%
蔵書面	32人	7%
運営面	10人	2%
その他	6人	1%
特に無し	45人	11%
無記入	96人	22%
計	437人	100%

D 図書館に対する御意見・要望などがありましたら記入して下さい。

施設面	41人	12%
蔵書面	50人	15%

運営面	46人	13%
その他	4人	1%
特に無し	36人	10%
無記入	168人	49%
計	345人	100%

3. まとめ

まず、図書館利用の回数については、週1回という人が96人で一番多く次いで週2回という人が74人でした。この設問で週1回と月4回は同じ意味を持ち、週2回と月8回は同じだという事に気がつかれたでしょうか。設問の失敗をした為に、正確には週1回利用者は103人、週2回利用者は75人という事になります。現在の図書館に対する意見について具体例をあげると、

<施設面>

冷暖房が欲しい	9人
机・椅子が古い	9人
自習室を広くして	6人
防音設備が欲しい	4人
ロッカーに鍵をつけて	2人
トイレが欲しい	1人

<蔵書面>

蔵書を増やして	21人
資料が古い	21人
雑誌を増やして	4人
新刊本、ベストセラーが欲しい	4人

<運営面>

開館時間を延長して	15人
貸出期間をもっと長くして	7人
係員の対応が悪い	6人
館内が騒がしい	5人
カバン・袋類を持込可にして	4人
館内閲覧の手続きが面倒	4人

又、新図書館に対する期待については、

<施設面>

自習室が欲しい	107人
冷暖房完備	56人
AVホールが欲しい	46人
防音設備(個室等)	7人
キャレルが欲しい	6人
閲覧席を増やして欲しい	3人
トイレが欲しい	2人
学生の為の選書室	1人
防塵設備	1人

<蔵書面>

蔵書を増やして	16人
新刊本・小説を増やして	5人
専門書をふやして	4人
雑誌・文芸書の充実	3人

<運営面>

検索システム採用	5人
開館延長	4人
係員の対応の改善	2人
貸出しの機械化	1人

以上、簡単にまとめてみました。たくさんの方々の声を聞かせていただけて幸いでした。きびしい批判もありがたく受けさせていただき、明日からのサービスに生かしてゆきたいと思っております。やがて建つ新図書館が利用者の皆様にとって、使いやすく親しみやすいものにできれば……と思っております。今後も真摯な御意見をお寄せ下さい。



第4回 なんじゃもんじゃの会だより

去る10月16日(金) 午後4時20分から7時まで、教養図書館閲覧室において、第4回なんじゃもんじゃの会を開催しました。当日の参加者は22名。以下は、今回の発表者徳永清志君(獣医学科1年)の寄稿です。

☆

28才の老体に鞭打って始めた獣医学の勉強、自ら希望し、かなりの覚悟をしていたにもかかわらず、全く受身に講義を聴き、下宿と大学の往復を毎日くり返す単調な生活に、早や1学年前期にして、精神的にまいりかけていました。

昨年まで、2年間アルジェリアでフランス語通訳として、くる日もくる日も、現地人相手に中ばけんか腰で意見を戦わせていた時には、その日の仕事を終えると心身共に疲れはて、泥のように眠ったものでした。しかし、今考えてみると、そうやって毎日大声を張り上げていたおかげで、自分の心の中に、ストレスとかフラストレーションといったものが全くたまらなかった(たまる暇がなかった?)ような気がします。そんな、1日の大半を、おしゃべりで過ごす生活から、じっと座って講義を聴く(特に教養部では)生活への180°の転換は、思っていた以上に私に大きなストレスを生みだしていたようです。

そんな折、法学の出川先生より「なんじゃもんじゃの会で話してみないか?」という、お誘いを受けました。私はその時、一応、日本人的にとまどった表情をしながらも、心の中では“やったね!”とつぶやいておりました。“久しぶりに人前で思い切りしゃべれる!”……自分でも怖い性格だと思います。……

そういう訳で、快くお受けしたのですが、前回までは、経験豊富な先生方の講演であり、それに比べれば、まだヒョッ子の私は、いったい何を話したら良いのか悩めば悩むほど、考えがまとまらず、結局ほとんど何も決まらぬまま、当日をむかえてしまいました。

しかし、20人余りの参加者の方々のあたたかく熱心な眼指、図書館職員の方々の心づくしのお茶とお菓子でのもてなしのおかげで、ひじょうになごやかな雰囲気の中で会を進めることができ、無事この大役を務めることができました。ただ、当初できるだけいろいろな話題に関して、参加者の方々とディスカッションしたいと思っていたのですが、一旦始めると、あれもこれもと話したいことがどんどん心に浮かび、結局2時間半余りほとんど私1人しゃべりっぱなしになってしまい、私自身のストレス解消には充分役立ったものの、聴いて下さった方々の中には、押しつけがましく感じられた人もおられたのではないかと反省しています。しかし、その話の中で、特に私よりも10才近くも若い学生諸君が、彼らの知らない世界のことを少しでも感じとってくれたなら、私にとってこの上ない喜びです。会を終えしばらく快い脱力感を感じながらも“これから5年余りの間、どうやって日々蓄積していくであろうストレスを解消したものやら!”と思い悩む今日この頃です。



ナスレッディン・ホジャ物語

小 野 健 一

ホジャの家の前を葬式の行列が通る。棺の後ろを女房らしい女が泣き乍らついて行く。

「あなたったら何だって私をおいて一人で行っちゃうの。あそこは暗いし、寒いし、食べものだって無いし……」

それを聞いたホジャがあわてて家人に言う。

「早く戸を閉めろ戸を閉めろ。あの死人はどうやらうちへ来るらしい」

＊

ホジャのおかみさんがホジャに聞く。

「ねえあなた。私がチャドルを取って顔を見せて良い人は誰と誰？」

ホジャ曰く。

「わし以外なら誰でも良し」

＊

こんなのがホジャ物語。さ・わ・り・ををちょっと紹介した次第である。ナスレッディン・ホジャはトルコのイソップと言われる人で、彼を主人公にするエピソードや、彼を話し手とする説話の類が五百ほど伝承されている。伝承圏は極めて広く、トルコ、エジプトから北アフリカ、ヘブライ、グルジア、イラン、ロシアに及ぶ。トルコのEskereでは毎年7月のはじめに彼の祭典が行なわれる。イソップとちがって、彼は実在の人物ではないらしいのだが、その存在は、正に空気か水のように、オリエントの人心に深く浸透している。

ナスレッディン・ホジャのホジャは固有名詞ではなくて、僧侶を意味する敬称。トルコではHoca、エジプトではGoha、ヘブラ

イではDjohaと綴られる。つまり、ナスレッディンという名のお坊様という意味であるが、物語の中の彼は、僧侶よりもむしろ賢人、知恵者、先生とでも言った人物になっている。図像では、彼はいつも驢馬の背に後ろ向きに乗った姿で表現される。そんなオリエントの土産もの人形を御覧になったことがおありではないだろうか。伝承によると、彼は弟子たちと一緒に歩くとき、彼等と顔を向き合わせて話ができるように、驢馬の背に後ろ向きに乗る習慣であった。恐らくこの騎乗姿が、図柄の面白さの故に、図像表現の約束として定着したのであろう。

この、いかにもイスラム的な、ちょっと辛口のユーモリストは、残念乍ら私ども日本人には殆ど馴染がない。20年ほど前に護雅夫氏訳『ナスレッディン・ホジャ物語』（平凡社東洋文庫）が出版され、はじめてこの伝承説話の全貌が紹介されたが、それ以後の出版がアリス・ケルジーによる翻案『天からふってきたお金』（岩波おはなしの本）だけでは、日本の子供たちは相変らず彼を知らずに大きくなって行くほかはあるまい。尤も、ホジャ物語の、辛口と言うか、渋口と言うか、つむじの曲ったユーモアは子供にはやや取りつきにくいかも知れないが、近頃の吹けば飛ぶような笑いに食傷している大きな子供たちには是非一読をお奨めしたい。

（物理学）

『ナスレッディン・ホジャ物語』

（081／To82／38）

☐ 冬休み中のお知らせ

冬期休暇中の貸出、開館等については下記のとおりとします。

1) 長期貸出

貸出期間 12月10日(木)～1月14日(木)

冊数制限はありません。

(但し、雑誌は対象外です。)

2) 開館時間

12月14日(月)～12月25日(金)

1月5日(火)～1月6日(水)

平日 午前9時から午後5時まで

土曜日 午前9時から午後1時まで

1月7日(木)～

平日 午前9時から午後6時まで

土曜日 午前9時から午後1時まで

3) 閉館

12月26日(土)～1月4日(月)

☐ 後期試験に備えて

1) 開館延長

1月16日、23日の両土曜日は午後3時まで開館します。(平日は午後6時まで)

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中しがちです。このため、予約の多いものに限り、一夜貸し、三日貸し等の措置をとることがあります。

☐ 表紙解説

待降節の絵と言葉

石 多 正 男

キリスト教の一年は待降節から始まる。これは神の子イエスが地上に降りるのを待つ節で、毎年クリスマスの4回前の日曜日から始まる。今年の場合だと、11月29日(日)からである。ヨーロッパではこの頃から、日の暮れがはやく、寒さも厳しくなる。町にろうそくの光がまばゆくなり、クリスマスの市がクリスマスを待つ人々の心を暖かくする。ただ、日本とちがって非常に静かだ。

表紙の絵と言葉は、イエスの母となるマリヤが突然天使から、乙女のまま神の子イエスをみごもることを伝えられた瞬間を描写したものの。いわば待降節の絵であり、言葉である。

(独語)

『受胎告知』

鹿島卯女 監修 高階秀爾 編

1977年12月発行 鹿島出版会

(禁帯出 723/J98)

☐ 編集後記

今回は、伊藤俊洋先生と野村先生にエッセイを、石多先生に表紙解説をお願いしました。

また、書評欄に小野先生の寄稿を掲載しました。

特集としては、7月に実施したアンケートの集計結果報告を掲載しました。皆様の御協力を感謝します。

閲覧ニュース 53号

1987. 12発行

北里大学教養図書館

発行責任者 手塚 甫

〒228 相模原市北里1-15-1
電話 (0427)78-8005